

受講番号 18022 学校名 高知追手前高等学校 氏名 中野 亜紀

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 39名  
 科目名 英語 単位数(授業時数) 4時間 使用教科書名 PROMINENCE 必修英文問題精講

クラスの様子・特徴

全体的におとなしく、授業に対しては受身な印象である。当てられれば答えるが、積極的な発言が少ない。一方で、warming-upやシャドウイングテストなど、パターン化されていて活動の目的がはっきりしていることには意欲を持って取り組んでいる。

問題の確定

新課程の影響が大きく、地道な学習に慣れていない生徒もいる。自力で学習に取り組めるような手だてを与える必要がある。

予備調査

A 授業の観察

静かに授業を聴いているが受身な印象が強い。小テストの取り組みにはかなりの個人差がある。パターンが決まった予習はしてきている生徒が多い。消化すべき内容が増え、授業の進度が速くなると、ノートを取るのに必死の様子である。

B 生徒による授業評価

6月実施のアンケートでは、約85%の生徒が授業を理解しており、約75%強の生徒が意欲的に取り組んでいると答えている。予習は約72%が、復習は約65%がしている。つけたい力は話す力以下読解力・作文力・和訳力・語彙力などと続く。

C 学力データ

入学前のスタディサポートでは平均的水準だが、読解力がやや低く強化ポイントとされている。5月・6月の定期考査等では平均より低いが、6月の実力テストでは校内2位であった。7月の模試では校内平均をわずかに下回っていた。

リサーチ・クエスチョン

中学卒業程度の基礎学力がある程度ついたクラスで、どのようにすれば読解力やリスニング力伸長のカギとなるフレーズリーディングが、生徒各自の今のレベルよりできるようになるか。

仮説・実践・検証

仮説1

意味のまとまりの単位を示すスラッシュを入れるべき箇所を明示し、何度も授業でトレーニングを重ねること、文章をどこで切ったらよいかを意識し、自分の力で適切に切れるようになるだろう。

実践1

4月当初のオリエンテーションで提示した内容を、折に触れて口頭で説明をする。教科書本文をフレーズごとに分かち書きしたプリント(併せて熟語・文法・構文情報も記載)を作成し、それを使って授業を行う。毎時間、教科書本文や英検準2級程度の英文を使って「フレーズリーディングテスト」(以下PRテストと略)を行う。

検証1

スラッシュを入れるべき位置は絶対的なものではないが、授業での説明を聞いてノートに書き込んだり、配布したプリントをノートの該当ページに貼って整理している生徒も多い。8月のアンケートでは、全員がとても又はかなり「役に立つ」と回答し、大部分が分かってよいと積極的に評価している。PRテストの結果はほとんどの生徒が10/12以上で、満点を取る生徒も毎回おり、よくできている。

仮説2

CDを聴いての音読や音読筆写と組み合わせることで、音の切れ目=意味の切れ目であることを経験的に理解し、フレーズリーディングの感覚が身に付くだろう。

実践2

教科書のCDを聴かせる際にスラッシュ位置で止めたり、教員のモデルリーディングの際にカスタネットを用いてスラッシュ位置を示したりするなど、聴覚に訴える方法を探り入れる。音読の際にRead&Look Upをフレーズごとに行い、視覚的にもフレーズごとに捉えさせる工夫をする。PRテストの後半に音読筆写コーナーを設け、書く際にもフレーズを意識させるようにする。

検証2

未習の英文に自分でスラッシュを入れるのは難しいと感じる生徒でも、示された位置で入れることなら可能である。予習段階ではやってなくても、授業でノートに書き込む生徒も見られた。また、フレーズごとに溜めこむRead&Look Upを繰り返すことで、意味のまとまりの単位を意識しているようである。

仮説3

フレーズ単位での理解を読解やリスニングに応用することで、英文を頭から順に理解していくことの重要性を認識し、積極的にフレーズリーディングを行うようになるだろう。

実践3

文構造理解とそれに基づいた和訳を目指す新テキストに移行してからも、フレーズごとに分かち書きしたプリントを作成し、授業での説明もそれを使用してフレーズ単位で行い、ことあるごとに意味のまとまりごとに英文を捉えていくように指導する。また、フレーズごとに教員が同時通訳的に日本語を与えることで、頭から英文を理解していく習慣をつけさせる。教科書のCDや模試等のリスニング問題に当たるときにも、同様にする。

検証3

11月実施のアンケートでは、約30%の生徒が読解力が、約35%の生徒が和訳力がついたと自己評価している。リスニングについては約10%しか力の伸びを実感していないが、11月の模試では正答率68.0%と学年最高の結果を出した。また、長文読解問題でも、校内2位の結果が出た問題もある。週末課題の長文を読む際にもスラッシュを入れている生徒が約1/3ほどいる。

研究の成果

模試やテストの成績に確実に反映されているとは言いがたいが、11月の模試で偏差値60以上の生徒の数が微増し、40未満の生徒が減っていることから、わずかながらレベルアップができていたと考えたい。アンケート結果から、英文をきちんとフレーズごとに理解してほしいというこちらの意図は充分伝わっているようである。また、5月当初と比べると、教室内でかなりリラックスしていて、自由な発言や問いを全体に投げかけたときに積極的に答える生徒も出てきた。さらに、英語の力の伸び悩みや勉強のしかたを相談してくる生徒も増え、自分から学習に取り組む力を伸ばそうと努力し始めている証だと思われる。

今後の授業改善の課題

フレーズリーディングの重要性を強調し学習の道筋を示してきたが、まだまだ全員の生徒自身のものになっていないとは言えない。今後は教員が提示していくばかりではなく、生徒自身がこの手法を使って自律的に学習をすることを促したい。そのために、授業でも読解やリスニングに取り組む機会をさらに多く提供するなど工夫を重ね、さらなる手だてを講じたい。